

《名所江戸百景》考

大久保純一

Study on the Hiroshige's "One Hundred Celebrated Places of Edo"

はじめに

- ①《名所江戸百景》の概要と問題点
 - ②《名所江戸百景》の構成
 - ③図様の源泉
 - ④『江戸名所図会』への依存と脱却、そして俯瞰構図から近像型構図へ
 - ⑤《名所江戸百景》の主題
- おわりに

目論要旨

歌川広重の最晩年に制作された《名所江戸百景》は、従来、全二〇図という規模の大きさから、彼の江戸名所絵の集大成としての位置づけがなされてきた。しかしながら絵画史の分野では、近景のモチーフを巨大にクローズアップし、その奥に風景を覗き見せるという奇抜な構図が主に論じられ、この挿物が成立する背景などが十分に論じられてきたことはなかった。本稿では、《名所江戸百景》を制作時期の順序に配列し、それをもとに、この挿物の制作意図を読みとろうとするものである。

構図法の変化と『江戸名所図会』との関係性を読みとることから、当初の名所図会的な錦絵から脱却し、名所絵としての説明性を犠牲にして、鑑賞者との視線の共有感覚を重視する構図へと移行していく過程を明らかにした。

《名所江戸百景》刊行途中における制作姿勢の変化は、この挿物の名所選択の特異さとも無関係ではない。この挿物には定番的な江戸名所のいくつかが欠落し、一方で

『江戸名所図会』にさえ載らない地味な場所を多数収録している。また、江戸の町の由緒を示唆するようなモチーフをしばしば画面前景に大きく配している。こうした諸特徴は、地方への江戸土産として制作された一般的な江戸名所絵とは異質なもので、むしろ江戸という都市の中にいる者に、より配慮したことの表れとみられる。上述の名所絵としての説明性を犠牲にし、鑑賞者との視線の共有感覚を重視する構図への移行も、《名所江戸百景》の購買層に、江戸の都市民へとシフトさせていったことを反映しているものであろう。

一九世紀には自分たちが住む地域に関心を向け、その由緒に強い関心を抱き、地域史を編纂し、新たに名所を見出し、こうとする意識が台頭してくるが、《名所江戸百景》もそうした時代思潮と無関係ではないと考えれば、この挿物の持つ数々の特異性もスムーズに理解できるのである。